Ⅵ. 病　害

枝・芽の病害

○ 幼果菌核病

カビの一種が原因で起こる伝染病で、開花、開葉期に発生し、新葉、葉、新枝、果実が侵されます。この病気の被害部は、急激に軟化、腐敗し、被害が酷い場合には、枝先まで枯れて樹勢を衰えさせます。

（除去・予防方法）

患部を切り取り、焼却処分します。予防が難しい病気ですが、地面を湿地にしないよう排水を良くし、剪定を行なって空間湿度を低くします。

○ せん孔褐斑病

春から秋、特に７～８月に多発します。葉に１～５㎜くらいの丸い褐色の斑点が生じ、のちにこの部分が抜けて丸い穴があきます。

（除去･予防方法）

病葉の多く出ている枝は、早めに切り取り、焼却処分します。落葉した病葉は集めて埋めて下さい。幼葉期から２週間おきに適正な薬剤を散布します。

○ こうやく病

病原菌はカビの一種でカイガラムシ類と共生して繁殖し、５～６月ごろ、この膜の表面に胞子を生じ感染します。枝や幹の表面に、灰白色や赤茶色の膜が形成されます。この膜は菌糸が集まったもので、これが多発すると樹勢が衰えます。

（除去・予防方法）

ブラシ等でこすり落とすか、薬剤を発生部に塗布します。また、カイガラムシを駆除し、剪定を行って通風、日当りを良くします。

農薬の使用に当たっては、販売店に病気に適する薬剤をお問合せの上、使用方法を守って使用してください。

根・幹の病害

○ならたけ病

ナラタケ菌が根や根元の傷口から侵入し、樹皮下の形成層部分を侵して、夏場に突如葉がしおれ始め、枯死に至らしめます。

○防除・予防方法

防除方法は確立せれておらず、発生して枯死した木は根を残さず除去します。土壌を良好にすることで発生しにくくなります。地面を湿地にしないよう排水を良くし、施肥を心掛けます。

○根頭癌腫病

根にコブが発生する病気で、急速に枯れることはありませんが、患部が肥大すると樹勢が衰えます。

（防除・予防方法）

防除方法は確立されておらず、患部を取り除いても再発することが多い病気です。発生して枯死した木は、根を残さず除去します。患部の摘出自体が難しいので、土壌を良好にすることで樹木を健全にし、患部を肥大しにくくします。また、地面を湿地にしないように排水を良くします。

○腐朽菌による樹勢衰退

不適切な剪定や傷が原因で幹や枝の傷口部分から侵入し、枯れ枝や樹勢のない樹皮下の形成層部分に侵入していきます。

（防除・予防方法）

発生した感染部をなるべく除去し殺菌剤を塗ります。樹勢を良好にすることで発生しにくくなります。過密植えを避け、剪定を行って風通しを良くします。

農薬の使用に当たっては、販売店に病気に適する薬剤をお問合せの上、使用方法を守って使用してください。

ソメイヨシノをてんぐ巣病から守ろう

・開花時期のてんぐ巣病。玉状の緑によってサクラ本来の美しさが損なわれる上、放っておくと伝染源となって他のサクラに広がってゆく。

・落葉期の状態。小枝が多く出て玉状になっているのが分かる。

てんぐ巣病はカビの一種が原因の伝染病で、開花時、発病した枝についた葉の裏面から病原菌の胞子が空気中に飛んで、正常な枝に付着し伝染増殖します。感染するとその部分に小枝が多く出芽し、花が咲かなくなる病気です。放置しておくと感染枝を衰弱させ、枯死してしまいます。

①発生しやすい場所

風通しと日当たりの悪い場所
湿度の高い場所
密植している場所

②防除方法

現時点では薬剤での防除方法が確立されていないため、病巣部を切除するしか有効な対策はありません。作業は落葉期間中に行います。１度の除去作業では取り残しなどがあるため、最低３年間は継続して除去作業を行うことが重要です。

③予防方法

サクラの中でもソメイヨシノは感染しやすい品種なので、周辺にこの病気にかかったサクラがある場合にはこの品種を避けることや、病巣部の切除作業が出来ない場所には植えないことも一つの方法です。

てんぐ巣病の感染初期には枝が独特なうねり方をします。この時に病徴を見極めて切除すると効果的に予防できます。

初期状態でも独特な枝のウネリがある

病巣部の元は正常な枝より太いコブが出来る